

第2回「大分県竹田市」

—結核で夭逝した瀧廉太郎の足跡を訪ねて—

結核予防会総務部長 竹下 隆夫

大分県の熊本県境に位置する豊後竹田は、瀧廉太郎が13歳から15歳までの約2年半、多感な少年期を過ごした山紫水明の地であった。竹田の人々はこの東西5条、南北5条の碁盤の目の城下町を自ら「九州の小京都」と称し、北の稲葉川を京都の加茂川に、南の白滝川を桂川に比している。そして、高台にそびえる岡城址(国指定史跡)は、石垣に残された佇まいも、城址からの四周の眺めも絶景であり、いかにも「荒城の月」(作詞：土井晩翠)を彷彿とさせる風情であった。

竹田市立図書館長北村清士はその著『瀧廉太郎を偲ぶ』で、「荒城の月」が人々の心に残るのは、「彼の靈感が岡城址の印象から生れ出たメロディ」で、「その幽婉で糸のような調べは、日本の民族的なものであって、かつて、寝ても覚めても忘れなかった、岡城址からの印象の所産である」と記している。岡城の歴史は古く、文治元(1185)年に源義経を迎えるため緒方三郎惟栄が築城したと伝えられているが、現在残されている城郭は文禄3年(1594年)に岡藩を統治した中川秀成が築城したものという。



桜の季節の岡城址(パンフレットより)

明治期を代表する作曲家瀧廉太郎は、留学先のドイツで結核を発病し、23歳10か月で無念の生涯を閉じた。彼の生涯の足跡を辿ると、大きく三つの時期に分けられる。第一期は竹田で過ごした少年期で、ここで音楽の才が芽生え育まれた。第二期は15歳という最年少で東京音楽学校(現：東京藝術大学)の予科に入学して

からドイツ留学までの5年余で、冏抜けた才能が開花していく時期である。そして、第三期は異国の地で結核を発病し、思いを遂げることなく帰国して病床で最後の曲を書いた時期である。

瀧廉太郎は、明治12(1879)年8月24日、東京府芝区南佐久間町(現：東京都港区西新橋)に生まれた。瀧家は江戸時代、日出藩の家老職をつとめた上級武士の家柄で、父・吉弘は大蔵省から内務省に転じ、大久保利通や伊藤博文らのもとで内務官僚として勤めた後、地方官として横浜や富山を経て大分、次いでこの竹田に移り住んだ。明治24(1891)年末のことで、翌年1月、直入群高等小学校第2学年に転入する。



瀧廉太郎の銅像(岡城址)

当時住んだ官舎は由緒ある侍屋敷で、現在は「瀧廉太郎記念館」として公開されている。屋敷の裏には立派な蔵があり、彼が使ったオルガンやヴァイオリンが残され展示されている。ヴァイオリンもさることながら、彼の弾くオルガンは特に優れた腕前で、その軽妙さは神業に近いと高等小学校の先生方も一目置いていたという。

話は逸れるが、この記念館の名誉館長は故人となったジャーナリストの筑紫哲也で、瀧廉太郎の妹・トミが筑紫の祖母に当たる縁という。

瀧廉太郎はまた、独楽回しの曲芸に秀でていたり、強い近視眼ではあったが3年生の代表として出品した馬の絵の鉛筆画で大分県主催の共進会(博覧会)で最

高の特別賞を受賞したというから、彼の才能の萌芽は実に多岐にわたるものであった。これが第一期である。



瀧廉太郎記念館の正門（竹田の旧居）

瀧廉太郎が「東京に行って音楽学校に入学したい」と音楽の道を熱望したのは、卒業を翌年に控えた4年生の頃というが、彼を大学に入学させ能吏にしたかった父の反対にあう。しかし、彼の熱い思いは父の気持を溶解し、高等小学校を卒業した翌明治27年の5月に上京を果たす。上京後は麹町の従兄瀧大吉の許に世話になり、同年9月に最年少の15歳で東京音楽学校の予科に入学、翌年本科（専修部）に進学、明治31年7月本科を首席で卒業、19歳で研究科に入学、研究科2年生になると20歳の若さで音楽学校のピアノ授業嘱託と授業補助を拜命している（有給）。

彼のピアノの腕前は抜群で、毎年の学友会音楽会でピアノ独奏を披露しているが、明治32年4月の記念音楽演奏会では皇后陛下（昭憲皇太后）の前で御前演奏を行ったという。

彼の作詞、作曲は明治30年、17歳の時に始まる。作詞の処女作は「砧」、同作曲は「日本男児」で、その後数多くの作曲を手がける。明治時代の前半には多くの翻訳唱歌ができていたが、日本語訳の歌詞が難しく、幼稚園や小学校低学年の児童はその意味を理解できないで歌っていた。こうした状況に対し、彼は「あへてその欠を補ふの任に当る」（『四季』序文）として、子供の情操教育の観点から子供の生活に即した、歌ってすぐ理解できる、純真さを大切にした歌を作ることを自らの使命とした。

作詞で名コンビ役を果たしたのは、東京音楽学校の2級上にいた東くめで、日本生まれの最も古い童謡作品として知られる「お正月」「鳩ぼっぼ」「雪やこんこ」などは東くめ作詞、瀧廉太郎作曲の幼稚園唱歌（明治33年編纂）に収められている。

また、単純平明だが実に気品ただよう「花」「納涼」「月」「雪」は、明治33年に作曲された組曲『四季』であるが、メンデルスゾーンやシューマンの影響を受けて日本の情緒を西洋形式の作品にした最初の試みとも言われている。そして、彼の代表作である「荒城の月」が「箱根八里」等とともに文部省編纂の「中学唱歌」に掲載されたのは明治34年である。

なお「荒城の月」はベルギーで讃美歌になっていたというが、実は彼は明治33年に麹町の博愛教会で洗礼を受けたクリスチャンであった。

また、毎年暑中休暇には竹田町に帰省し、高等小学校の同窓会に出席、友人たちとの旧交を温めていたというから、やはり竹田は彼にとって大切な郷里であったにちがいない。これが第二期である。



瀧廉太郎記念館に保存されているオルガン

明治33年6月、瀧廉太郎にピアノ及び作曲研究のため満3か年ドイツ留学の命が下る。この時、ドイツのライプツィヒ音楽院（メンデルスゾーン設立）には既に2年先輩のヴァイオリニスト幸田幸が留学しており、彼は2番目の音楽部門の文部省外国留学生となった。因みに、幸田幸は幸田露伴の末の妹で、姉に東京音楽学校教授の幸田延がおり、彼はこの二人から東京でも様々な指導を受けていた。

明治34年4月、横浜港から1か月半の船旅でドイツのハンブルグに到着、約4か月の入学準備を積んで、10月1日に憧れの音楽院に入学する。ピアノ教師タイヒミュラーは彼が演奏した「荒城の月」を聞いて、驚異の眼差しで「君のこの作曲は音楽日本の誇りだ」と褒め称えたという（『瀧廉太郎を偲ぶ』）。

しかし、悲劇は突然訪れる。入学からわずか2か月後の11月末、彼は歌劇「カルメン」鑑賞の帰路に発熱し肺結核を発病する。入院先はライプツィヒ大学附属病院であった。彼はドイツ滞在中親交をもっていた在留日本人達から代わる代わる見舞いを受け、励まされる。微笑ましいエピソードが一つある。異郷の空で病む彼がしきりに食べたがった福神漬を幸田幸がベルリンで入手して送り、励ましたというものである。

しかし、彼の容態は優れず、滞在1年で帰国を余儀なくされる。帰路、船がロンドンに停泊したとき、彼はイギリス留学中であった「荒城の月」の作者土井晩翠の訪問を受ける。実は二人が会うのはこれが最初で最後で、日本での再会を約したことはかなわぬこととなったが、土井晩翠は後年この約束を果たすため岡城址での瀧廉太郎の慰霊祭に仙台から駆けつけている。岡城址に土井晩翠の筆跡による「荒城の月」の石碑が建てられているのはこのためである。

おそらく無念の思いが募るばかりであったことは想像に難くない。瀧廉太郎が帰国の船上でひとり書いた「別れの歌」は実に切ない詞と曲である。

なごりおしむ ことの葉も
いまは述べ得で ただつらし
あすはうつつ けふは夢
残る思いを いかにかせむ
ああいかにかせむ

帰国後、彼は大分の両親のもとに帰って静養するが、明治36（1903）年6月29日、23歳10か月のあまりにも短い生涯は閉じられた。戒名は直心正廉居士、大分市の万寿寺に葬られている。彼の最後の作曲は、死の4か月前、明治36年2月14日、結核という病が希望を閉ざした病床で、最後の力を振り絞って仕上げたピアノ曲「憾（うらみ）」であったことは、彼の生涯を象徴して余りある。

瀧廉太郎同様、結核によって無念の最期を歴史に刻まざるを得なかった明治・大正時代の代表的な文豪や詩人、画家は数多い。二葉亭四迷、正岡子規、国木田独步、樋口一葉、長塚節、青木繁、高村光太郎、竹久夢二、石川啄木等々、枚挙に暇がない。結核予防会発行の青木正和著『結核を病んだ人たち—その生と死—』に詳しいので改めてご一読を勧めたい。

「結核予防切手の変遷」をご寄贈下さった小林佑吉様に感謝、厚く御礼申し上げます

結核予防会TBアーカイブ推進・運営委員会では、本誌を通じて「結核の社会文化史的資料」のご提供をお願いいたしておりますが、本年1月12日に、埼玉県八潮市で内科医院を経営されている小林佑吉様から、社会史的観点からする「結核予防切手の変遷」と題する、極めて貴重な2冊のファイルにまとめられた資料をご寄贈していただきました。小林様に深く御礼を申し上げますとともに、ここにご報告させていただきます。

ご寄贈いただきました資料は、1897年を嚆矢とする世界の結核予防切手を収集、整理し、解説も付した貴重な学術的資料で、1991年の世界切手展に出品され入賞を果たした丹精を込めた“作品”です。

本資料で整理された結核予防切手の変遷は、次の4つの時期に区分されています。

1. 第1期（1897～1925年）慈善の色彩の強い結核予防切手の黎明期
2. 第2期（1925～1940年）ベルギーなど西欧諸国を中心に発行をみた発展期
3. 第3期（1940～1950年）西欧諸国と共にラテンアメリカ、アジアの一部諸国から発行がはじまった最盛期
4. 第4期（1950年以降）結核予防切手の発行の中心が西欧諸国からアジア、アフリカなどの発展途上国に移った転換期

大変興味深い変遷で、次号では小林様ご本人から結核予防切手収集の意図や趣旨等について本誌にご寄稿をいただく予定でおり、また、その後の号では順次この変遷の具体について解説付きで掲載していく所存でおります。ご注目ください。



1897年にニュー・サウス・ウエルズで最初に発行された結核予防切手。ビクトリア女王治世60年を記念して、患者をいたわる天使の像が画かれ、寄付金の使途が結核ホームのためと記されている